



水のように澄んだ空が星を漬し、
星を現像していた。



大地を震わす和太鼓の律動に、
かんだか
甲高く鋭い笛の音が
重なり響いていた。



「え、ガチで？」



「完璧な文章などといったものは存在しない。
完璧な絶望が存在しないようね」



自称変わり者の寝言



トタンがセンベイ食べて
春の日の夕暮は穏かです



なにが出るかな、
なにが出るかな。



いつの世にも、恐怖と宿命は
大手を振つてまかり通つていた。

「あの泥坊が羨しい」

うらやま

これより私は、或る個人的な

回想を錄そうと思つてゐる。

其れはまだ人々が「愚」と云う貴い徳を持つて居て、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であった。

九歳で、夏だつた。

—あなたの歯が
生まれつきとても
健康であることは
とてもよくわかり
ました。



おれが非情の大河をくだつていたとき、
おれを導く船曳きの綱の覚えはもうなかつた、



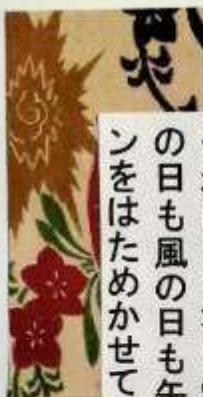
生長

三才

私に過去はなかつた



一九二五年に梅鉢工場という所でこしらえられたC五一型のその機関車は、同じ工場で同じころ製作された三等客車三輛と、食堂車、二等客車、二等寝台車、各々一輛ずつと、ほかに郵便やら荷物やらの貨車三輛と、都合九つの箱に、ざつと二百名からの旅客と十万を越える通信とそれにまつわる幾多の胸痛む物語とを載せ、雨の日も風の日も午後の二時半になれば、ピストンをはためかせて上野から青森へ向けて走った。





一日二十四時間のうちの一時間。



何ヶ月も何ヶ月も雨が降り続き、
もしかしたらこのまま雨の中に
閉じ込められるかもしれない。



「言つてなかつたけどさ、
あたし、大学行かないから」



ひと年前、伊太利亞の空気を呼吸とオナた

ジーファース

おい、ハンスのおやじ、

もう一杯、ブランデーを。

こんなゲームを御存知であろうか。



僕たちがとうとう自力救済に
乗り出したのは六月半ばのこと
だつた。

駆音がすべて真直ぐに立ちのぼって行くような秋日和である。



「ハートって一体何？」

世界の隅まで冒険し隊、春の特別編！」



フリベット通り四番地の
住人ダースリー夫妻は、
「おかげさまで、私どもは
どこから見てもまともな
人間です」というのが自慢
だった。



陸奥のまのゝかや原とほけども
おもかげにして見ゆとふものを

万葉集



お父さんがいなくて淋しいか、
と聞かれることがある。

屈折率

七つ森のこつちのひとつが
水の中よりもつと明るく
そしてたいへん巨きいのに



そいはするんどう一ちゃんの白いゆびの
あいだを抜けてゆきました。



橋場の玉川軒と云う茶式料理屋で、
一中節の順講があつた。

「スプリットタンって知ってる?」

私がこの世でいちばん好きな場所は
台所だと思う。

四月八日

わたしにとつてかけがえのない
ワルワーラさん！

きのうわたしは幸福でした。

九月十日、火曜日の放課後。

スコップと丸めたビニール袋を持って、あみ子は勝手口の戸を開けた。

吾輩は猫である。

ふたつのわが家

一年三組 藤井さゆき

あたしには、わが家が、ふたつ、あります。

おれの パーク の裏側
には プリクラ が一枚
貼つてある。

ベッドフォード 天は黒雲におおわれ、
真昼は夜となるがいい！

私たち四人は、
また水入らずで過ごしていた。